

心理学的観点からみた神話・昔話のなかの笑い

谷垣 紀子

1. 問題と目的

(1) 笑いの両義性

笑いをめぐる論考・研究は、古来より膨大な数が積み重ねられてきているが、近年の動向としては、「笑うこと」が具体的にポジティブな効果をもっていると述べる研究が目立つように思われる。たとえば伊丹ら（1994）、吉野ら（1996）のように、笑うことががんやリウマチといった疾患を持つ人の医学的な数値を、実際に、具体的に、好転させることが実証的に報告されている。このような流れからは、笑うことのポジティブな面へ具体的に目が向いていることがうかがえる。

一方、笑いについてネガティブなものを敏感に感じ取る論考も多い。たとえばHobbes（1651/1979）のように、「笑いは突然の得意の表れである」とか、柳田（1998）が笑いは人を相手としたひとつの攻撃方法でもあるとか述べたように、笑いのうちに何か隠された意図や笑う人当人にも気づかれていない攻撃性あるいは能動性を感じ取ることも決してまれなことではない。

このようにたとえばポジ-ネガという側面から見ただけでも、笑いに関する論考にはポジティブな面に着目するもの、ネガティブな面に意義や本質をみようとするものというように、論考によって一見矛盾するようなことが述べられることがある。論考によって対象としている「笑い」の種類が違う可能性も考えられるが、必ずしも著者らがその定義を明確にしているわけではなく、各論考において切り取られる笑いの側面は論じ手によって大幅に異なっているように思われる。

このことについて、たとえば浅田（2004）は笑いに関する理論を展望した上で、「人を楽しませ結びつけるという要素と、攻撃的で破壊的な要素という2つの両義的な性質」と端的に笑いの両義性を表現している。だが、そのような笑いの性質は、笑いについて全体像を明らかにしようとしたり、体系だった論を構えようとしたりする論じ手の試みを遠ざけてしまうところがあるように思われる。

(2) 両義的な性質が生み出す笑いの動き

一方で、「笑い」における「変化」の様相を論じた論考もみられる。たとえば山口（1984）が笑いを「自らを超えようとする宇宙的なリズム」と述べるのは、笑いの二面性・多面性をこえて、その本質的な動きの側面からとらえようとする態度のあらわれであると思われる。また、

「エネルギーの放出」という観点を打ち出した Spencer の論を踏まえ、「ずれと放出のメカニズム」によって笑いの包括理論を打ちたてようとする木村（1983）の試みは、笑いを、ポジかネガかというような対立軸からではなく、動きというより抽象的な点からとらえようとしたかなり興味深いものである。さらに、Freud（1905/1970）の機知に関する論考も思いだされる。彼は、機知を夢と同じく無意識のあらわれであると論じ、そこには笑い手の「無意識」に関する何かが隠されており、その「隠されたもの」が解き放たれ、笑い手も知らぬうちに心的エネルギーの放出が生じるところに笑いの本質をみようとした。Bergson（1900/1938）の理論も、「しなやかな生」に反して反復やこわばり、無反応など「機械的なもの」があらわれることを「滑稽な場面」の源にみていることから、一義的に笑いを切り取ろうとしたのではなく、相反するもののダイナミズムの中に生まれるものとして笑いをとらえていると考えてよいだろう。

しかし一方で、このように笑いを体系だった視点からとらえようすると、抽象的になって実際の笑いから遠ざかっていき、その論じ手の扱っている「笑い」が見えにくくなる部分がある。また、その論考が扱っている「笑い」の定義がしにくいことも、理論の包括化や体系化の難しさにつながるように思われる。先に触れたような両義的な性質を持つ笑いは、その論じる立場によって、まったく異なる姿をあらわす可能性をつねに考える必要があると思われるからである。

（3）心理学にとっての笑い

それでは、筆者が身をおく心理療法の実践の場では、「笑い」とはどのようなものと論じられているだろうか。先行研究をみると、筆者の知る限りでは、実際に臨床の場で生じた笑いを描き、これについて論じている研究は吉良（1994）と河合（2001）に限られる。これらは、実際に著者らの臨床実践場面でみられたクライアントあるいはセラピストの笑いを事例として示し、その機能や臨床場面で笑いを扱う際の留意点について触れているものである。

吉良は、面接の中でクライアントが思わずもらした笑いに着目し、「葛藤体験から距離を置く」ことができ、症状の軽快につながったと考察しているが、同時に笑うことが「葛藤体験から目をそむける」ことにつながる可能性も指摘している。総合考察においても、笑いについて「実に多様な心的活動が含まれて」いて、「心理療法での扱いも多岐にわたる」としており、笑いの意義について論じながらも、その多様性への慎重な配慮の必要性も強調されている。

また、河合も複数のかなり異なる印象の笑いをあげており、「いずれも治療的に意味あるもの」としているが、意図的に生じさせられた笑いには意味がなく、思わず生じた笑いに意味を見出している。ここでは、その多様性と同時に偶然性が強調されていると言えるだろう。

前節まででみたように、笑いのもつ要素や性質として先行研究で述べられているような、「ずれと放出」、「変化」といった視点から得るものは確かに大きい。しかしながら、このように臨床家が個々の笑いのもつ多様性や偶然性を強調していることからわかるように、心理臨床の分野では、たとえばそれがどのような「変化」であるのか、場に対してどのようなものをもたらしたのかという質的な肌理を理解する視点が求められているように思われる。

また、心理臨床の立場の特徴として、笑いを喚起するはずの素材を検討するのではなく、実際にそこに笑いが生じていることが論考の出発点となることが指摘でき、これが他分野における

笑いをめぐる論考との大きな違いであると考えられる。たとえば Nietzsche (1883-85/1970) は、ツァラトゥストラに「わたしから学びなさい—哄笑することを」と語らせた。そこにはたしかに笑いの本質をめぐる思想と物語が描かれていると筆者は考える。しかし心理臨床で多く出会うのは、求めても笑うことのできない事態であり、そこで笑いが生じること自体に大きな意味があると考えられる。さらに、「笑い」は「滑稽さ」や「ユーモア」と結び付けて考えられやすいが、心理臨床の場面においては、決して滑稽さを感じたときだけに笑いが生じるのではないことが上述の先行研究で明らかにされている。すなわち心理療法の視点で「笑い」について述べる時、それはすでに生じ、「笑い」としてしか生じえなかった出来事として、特定の感情や主観的体験とはいったん切り離してとらえる態度が必要であると考えられる。

したがって心理学的な立場においては、笑いを特定の状況や態度と関連付けて述べるのではなく、生じてきた笑いとそこで起こる動きがどのようなものを理解することが求められていると言える。

(4) 神話・伝承の中の笑い

ここで、笑いを扱う方法については慎重な検討が必要であろう。なぜなら、すでに見たとおり、笑いはとらえたと思ってもつねに他の側面をもっているものであるし、本論の目的に照らすと、実際に生じた笑いを個別具体的に扱うことが必要であると考えられるからである。

先に挙げた河合 (2001) は「トリックスターの笑い」「納得の笑い」「冷笑」「ゆとりの微笑」など、多様なあらわれをみせている笑いをいくつか提示している。それでもこれらの事例から結論のようなまとめを導きだすことは避け、むしろその「多様性」に言及していることは、笑いを、その肌理^{きめ}を生かしたまま、包括して論じることの難しさをよくあらわしていると筆者は考える。

本論では、神話や昔話、伝承の中に生じている具体的な笑いを素材とする。それは、上述した心理療法における笑いの扱いという点から考えたときに、意図的に引き起こされるものではなく、意味がなく、その点で語り継がれた構造の中で生じる笑いは自然なものと考えられるためである。そして、このような、笑いがあらわれる物語を集めて検討することで、その多様なあらわれの肌理^{きめ}を見ることができると考える。この方法は、河合 (1982) が昔話「鬼の子小綱」における鬼の笑いについて行っている。一方、河合のこの論考は日本人の意識のあり方をめぐっておこなわれたものの一部であり、「笑い」そのものを深く理解していくためには、こうした笑いのあらわれる物語を集め、重層的にそれをみていくことが必要であると思われる。本論では、このように、物語の中の笑いを集めて概観し、展望することで、笑いの多様なあらわれの諸相を描きだし、笑いをみる視点の手がかりを提示することを目的とする。

2. 動く笑い、動かされる笑い

(1) 「天岩戸」

古事記や日本書紀にみられるアマテラスの岩戸隠れの神話は、笑いとその重要な契機にみられる物語としてもっともよく知られている物語のひとつに挙げられるだろう。そこには重要な

モチーフがいくつも描かれており、これに関する先行研究も多い。したがって、まずこの神話と、ここでの笑いをめぐってなされてきた論考を概観しておきたい。

【天岩戸】(次田(1977)、大林(1963)を参考に筆者が要約。)

スサノオは根の国に行く前にアマテラスにいとまごいをするため高天原に向かう。その勢いがものすごかったので、スサノオが国を奪いに来たのではないかと恐れたアマテラスは、彼の心の潔白を証明するために、ふたりで誓約を行う。この誓約によって心の清いことを証明したスサノオは、心がおごって田を荒らし、アマテラスが神御衣を織らせている天服織女の小屋に馬の皮をはいでなげこむ。天服織女はびっくりして杼で陰部をついて死んでしまった。アマテラス自身も、驚き悲しんで天岩戸の中にこもってしまう。太陽神であるアマテラスが隠れてしまったことで、高天原も葦原の中国も暗闇に覆われ、よろずの災いが起こり始めるようになる。そこで八百万の神々たちが集まり、オモイカネの発案で、常世の長鳴鳥や真櫛、五百箇御統、やたの鏡などを調べ祝詞をあげる。そこでアメノウズメが天岩戸の前で足を踏みならして神がかり状態になり、乳房もあらわに、裳緒を陰部に押したれて踊った。八百万の神々は高天原がどよむほど笑った。この騒ぎを聞いたアマテラスが怪しんで何が起きているのか尋ねると、アメノウズメは「あなたよりも貴い神様がいるので、皆喜んで、楽しんでいるのです」と答える。アマテラスが少し外の様子を見たとき、すかさず差し出された鏡に自分の姿が映ったのでアマテラスはますます不思議に思い、外を見た。するとタヂカラオがアマテラスの手を取り、外に引き出した。そしてフトダマがアマテラスの後ろにしめ縄をはり、これ以上後ろには入らないよう伝えた。アマテラスが再び外にあらわれたため、高天原も葦原中国も自然と明るくなった。

この神話では、太陽神が隠れてしまうという圧倒的な暗闇の中で、アメノウズメの踊りによって神々の笑いが生じ、アマテラスが再び世界に姿をあらわす契機がつけられている。松本(1971)によれば、この踊りは鎮魂祭の儀式と関連しており、アマテラスの魂をよみがえらせようとする呪術性がこめられていると言う。また、それは性器露出を伴うものであると言われ、この行為に冬の魔を退散させ退ける呪術的な力のあることが指摘される。そして、この踊りと同時に起こる笑いにも呪術的な意味がよみとられている。神々がアマテラスを世界に呼び戻すために知恵を出し合い、場をしっかりと整えて、踊りを踊り、笑いを笑うその光景はたしかに儀式的な色彩を帯びている。他にも、吉田(1974)やNaumann(1963/1994)なども、冬の魔を祓い、豊穡と春の訪れを願う行為としての笑いに言及している。

また、河合(1982)も、鬼に追われる母と娘が最後に性器を露出することで鬼が笑い、母と娘は逃げることができたという「鬼の子小綱」の物語について、この性器露出と笑うことの関連について述べている。それは、この物語のクライマックスでは秘められたものと鬼の口が「開ける」ことが生じているというものである。これを敷衍して、天岩戸神話でもアメノウズメの身体と神々の口・身体が開いたときに、暗闇の中に神々の笑いが響き轟いて、天岩戸それ自体も「開ける」と理解することができる。

このように、ここでの神々の笑いは、アメノウズメの踊りに付随して生じているものだが、高天原全体を揺るがし、世界を覆う闇の中にも動きをもたらしものであった。ここで、この闇

の向こうから感じられる笑いの振動が、傷つき、閉ざされてしまったアマテラスまでも動かしたのだと考えられる。天岩戸という硬い岩の境界をものともせず越えていく笑いの動きの力強さがうかがえる。そして、このようなダイナミックな笑いは、暗闇という自ら直接的に作用を及ぼすことができない状況に対する行為という意味で呪術的で、祈りに似ていると言える。

(2) 「笑わぬ王女」

次に、心の動きを感じる事のなかった王女自身に笑いが生まれる物語をみていく。世界にこのタイプの物語はあるようだが、ここではロシアの物語を提示する。

【笑わぬ王女】（中村（1987）より要約。）

ある国にとっても美しい王女があった。欲しいものは何でも揃い、贅沢のしほうだいだったが、生まれてこのかた、王女は一度も喜んだことがなく、ほほえんだことも、ましてや笑うことも一度もなかった。その悲しげな顔に父王は、娘を笑わせた者に王女を妻にとらせるとお触れを出す。多くの若者が課題に挑戦するが、王女はにこりとしめない。そんな中、この国の片隅に正直で働き者の下男があった。この男の主人は、彼の働きぶりに、1年に1度すきなだけ取るようにとお金を置いていくが、いつも下男は銅貨1枚しか取らなかった。が、毎年水を飲みに行き、井戸に行ったとき、下男は銅貨を落としてしまう。それでも下男は気にせず仕事に精を出した。3年が過ぎ、今年も下男が銅貨を1枚もらって水を飲みに行ったとき、今度は銅貨は無事であったばかりか、これまで落とした2枚も浮かびあがってくる。下男はこれを神の褒美だと喜び、「いよいよおれも世の中を見ていろんな人間とつきあってみる時がきた」と思って歩き出す。歩くうちに鼠やカブトムシ、ナマズに順に出会い、彼らにせがまれるままに下男は銅貨を渡し、銅貨は1枚もなくなる。そのうち下男は町に着く。うろうろしているうちに、宮殿に行きつき、窓辺では笑わぬ王女が座って下男を見ていた。下男は気が遠くなり、泥たまりの中にばたんと倒れてしまう。するとどこからともなく、ナマズとカブトムシのおじいさんと、鼠のおばあさんがあらわれて駆け寄り、かいがいしく世話をやいた。鼠が服を脱がせたかと思うと、カブトムシが靴をみがき、ナマズが蠅を追いかつた。このまめまめしさを見ているうちに、笑わぬ王女が笑い出した。これで、下男は王女と結婚して幸せに暮らす。

この物語では、下男はまったく意図せず王女を笑わせることに成功するが、プロップ(2009)によれば、主人公の持つ黄金の鳩に人々がくつつく様子をみて王女が笑ったり、あるいは主人公が魔法の笛をふいて、王女の前で豚を踊らせると王女が笑うなどの類話があるようである。しかし、いずれにしても王女の笑いは、動物の動きに心が動かされて自然に漏れ出るような笑いであるにとらえてよさそうである。ここでは、笑うことに自然な感情が動き始めたことが感じられる。ここでもたしかに秘められていた王女の心の動きが露わにされる動きが生じていることがわかる。

さらに、笑う王女自身について考えてみると、笑うということは王女自身の希望ではなく、物語の中で王女はつねに受け身の存在である。笑う場面においても、ただ目の前で展開された出来事に思わず笑ってしまうという受動性がうかがえる。このように考えると、笑う行為には

笑う本人の意思とは無関係なところが強く、また同時にそこでは見えなかったもの—王女の心の動き—が半ば受動的に暴かれる側面があると考えられる。そして、意志とは無関係に動かされることで、婚姻というように事態も展開していく側面もみられる。

3. 不気味な笑い—神の笑いと人間の笑い—

(1) 「笑い男」

次に、笑いが人間の力を超えた恐ろしいあらわれ方をしてくる様子を見ていく。

【笑い男】(武田(1972)より要約。)

土佐では昔から勝賀瀬山の赤頭、本山の白姥、そして山北の笑い男という3つの怪物が知られていた。昔、樋口関太夫という船奉行が、山北へ獵に行き、山に入ろうとした。土地の百姓たちは、その日は山へは入れないことになっていると関太夫をとめた。しかし関太夫はそんなことは聞いたことがないと言って従者を連れて山へ入ろうとした。山腹まできてキジを狙っていると、100メートルばかり向こうの松に、ひとりの童子がきて関太夫を指して笑っている。年の頃は5、6歳ばかりで、その笑い声は大きくしだいに高くなってきた。童子が近づいてくると、その笑い声はますます大きくそのあたりの草も木も笑っているようであった。やがては風の音や水の音までが高笑いをしているように聞こえたので、関太夫は転がるように山を下りて逃げた。山のおもとの村里まで来ると、気も遠くなり倒れてしまった。ふたりは村の人にいたわられ、ようやく家まで帰って行ったが、その後もその笑い声は耳から離れず、とうとう病の床にふしてしまった。翌年関太夫は息をひきとったが、その笑い声は息を引き取るまで耳に響いていたという。そしてその声は、鉄砲でも打ちこまれるような音であったという。

この物語で印象的なのは、笑いが「音」として響き、こだまし続ける様子である。笑いは単に童子の声にとどまらず、木々や風、水の音のざわめきまでにも広がり、山全体が笑っているかのようである。笑いの「音」はとどめることのできない目に見えない動きの感覚を聞くものに与え、そのことが非常に恐怖を呼び起こす。このように、いったん「山」という人間の力を超えた場所で、人間の力を超えた存在が笑いだすと、それはもはやとどめることのできない響き・動きとして、彼を死に至らしめることになる。

ここで、「山の神」と笑いとの関連の強さが想起される。南方(1926)や長島(2001)に報告される、山の神にオコゼを捧げ、それに合わせて笑いを奉納するという「山の神とオコゼ」の儀式や、マタギたちが狩りを始めるときに山の中で笑いをともなった儀式を行うことも知られている。「笑い男」の物語と異なり、ここで笑うのは儀式を行う人間の側であり、一般にそれは山の神に獵の恵を願ったり、山の神が田の神として実りを里にもたらしてくれることを願ったりするために行われる。その一方で佐々木(2006)は「ヤマヒメが笑ったら大変が起こる」という言い伝えを記している。

このような伝承も含めて考えると、人間が先に笑うのか、あるいは神々の側が笑うのかということは、人間と山の神との関係の上で非常に重要な点であることがわかる。人間が暗闇の中

で笑うことが、山の神をなぐさめることにつながり、逆に山の神が笑う時には、人を死に至らしめるような霊威が含まれている。ここから、笑うことが人間と「山の神」との関係の上に機能しているものであるように考えられるが、その動きをみていくと、神に向かって開けようとするとき、人間は「儀式」という形で自らの意図に関わらず笑い、自らをまず開く。しかし逆にこの物語では、「関太夫」が無理に山の中に入っていくことで山の神の世界が突如として開かれる。そのとき確かに「関太夫」は「笑い男」と出会うが、響いているのは山の笑いであり、それは聞くものに恐怖を与え、死をもたらし。自らを開く準備ができていないときに会う笑いとはそのようなものであり、そこには死の危険が潜んでいることが、この物語からうかがえる。

(2) 「笑う人の島」

「死」として描かれていなくとも、未知の世界から聞こえてくる笑い声に人間が取り込まれていってしまうような物語がアイルランドの伝説にみられる。「ダン・カウの書」などの中に見出されるメールズーンの航海物語の中にみられる「笑う人の島」の項である（八住、1981）。この物語はメールズーンという青年が父親を殺した相手を探し船旅を続けるもので、物語の中にはその道中で一行が出会う数々の島のエピソードが描かれている。

【笑う人の島】（八住（1981）より要約）

そこでは大勢の人々が集まり、休むことなく戯れ合い、笑い続けていた。誰がこの島に上陸するか一行はくじを引く。当たったのはメールズーンの乳兄弟で、島に上陸したとたん、彼は島の人々と笑い続け、一行のもとに引き返してくることはなかったし、そうしたいとも思わなかった。乳兄弟は他にあとふたりいて、出発の際にメールズーンに断られたにも関わらず、航海についてきた者である。すでに他のふたりはそれぞれ別の島で一行と分かれ、この笑う人の島で、最後の一人もいなくなったことになる。

この短い記述の中で印象に残るのは、笑いさんざめく様子は、笑っていない他の人に警戒感を与えるのだが、それにも関わらずその人にもその笑いが伝播してしまう、その感染しやすさである。そして、その笑いの輪の中に入っていくことで、もっていた警戒感や違和感といった意識や、さらに旅を続けるという展望も見事に雲散霧消させられてしまう力の作用である。ここでは、そうした秩序を消滅させる動きが顕著に描かれているといえよう。

(3) 「入らずの山」

さらに、笑いは人間の力を超えた世界から人を突然に襲い、あちら側の世界に連れ去ってしまうほどの威力をもっていることも、物語からはうかがえる。

【入らずの山】（武田（1972）より要約。）

昔、根木屋という土地に不人情な庄屋があり、ある日彼は村中の者を集めて自分の持ち山の杉の下枝を刈るように命じた。村中の者が出なければならず、それを免れることは許されない。

乳飲み子を抱えた一人の女があったが、あまり急なので子どもを他の人に預けていくことも出来ず、背中に負ったまま山へ行き、一日中こきつかわれた。やがて日も暮れて一同がやれやれと思っていると、今度は下枝を束にして庄屋の家まで持ってくるよう命じられた。乳飲み子を負った女は子どもを背負っているのに、どうしても杉の下枝を背負うことができないが、庄屋は彼女が仕事を免れることを許さなかった。そこで女は乳飲み子を山に置いたまま枝束を背負って庄屋のところへ持っていく、再び山へ引き返して、子どもの名を呼びながら真っ暗闇になった山の中へ入って行った。翌日になって、村人がこの親子を探しに山へ入ったが見つからず、ただ木の枝に破れた女の着物がかかっているのみであった。それから幾日かたって、庄屋の家の一人息子の誕生祝いがあった。酒盛りの後、急に庄屋がゲラゲラと笑い出し、眠っていたわが子を小脇に抱えて「子どもを返せ、子どもを返せ」と叫びながら山のほうへ駆け上がって行ってしまった。急を聞いてかけつけた親類や知人の者どもが庄屋の行方を追って行ったがどうしてもとらえることができない。幾日も探したがとうとう見つからなかったという。これはあの哀れな女のたたりであろうといい、それからその山は入らずの山ということになった。

庄屋が笑うとき、「子どもを返せ」と言っていることから、庄屋に女の霊が憑依したように描かれていると理解してよいと思われる。この物語では、人間の笑いであっても、この世ならざるものに取りつかれたとき、おそろしい笑いを笑うことが描かれている。ここでは、笑うことは決して人間的な感情や内面の動きを示すのではなく、あの世の力にとりつかれた者があちら側の世界に向かうときの響きとして聞こえてくる。突然の笑いに襲われ、庄屋は急に不気味な存在となり、自ら山の向こうに入っていく。いってしまう。

このとき、やはり笑いは、庄屋自身の意図を超えて彼に降りかかり、彼の全身を震わせ、日常の及ばない山の中の世界へと彼を動かすほどの力を振るう。ここで笑いが動かす動きは、笑う者・動かされる者自身からは顕著に遠く、彼の意志というのは消滅してしまっていることがわかる。

4. 骸骨の笑い ― 物音としての笑い ―

次に、笑うのは人間でも、あちら側の世界の者でもない物語をみていく。この物語では、ある良家の息子がならず者の仲間に入ったので、父親から勘当され、藁1本背負って旅に出る。行く道すがら、「わらしべ長者」のように、息子は藁を朴の葉と交換、さらに朴の葉を味噌と交換する。息子は、宿を取って休み、味噌で団子をつくって食べる。その町で次のような出来事が起こる。

【笑い骸骨】（平野（1958）、稲田（1975）より要約。）

その町では、まだ日が高い中から戸を閉め切って静かにしているので、宿屋の亭主にその訛をきくと、毎夜夜半になると、大きな角をささげて通る化け物があるからこうしているのだという。それなら今夜その化け物をしとめると、息子は物陰に隠れて様子をうかがっていた。夜半になり、大角をささげた化け物が歩いて来た。息子は物をも言わずに斬りかけたが、化け物

は「ちょっと待ってくれ、俺に刀を斬りかける前にわけを聴いてくれ」と言う。息子がわけを尋ねると、化け物は「俺はむごい継母のために味噌桶にさかさに打ち込まれて死んだ者の亡霊である。そのためにこうなって毎夜出ているが、あの家の戸口には神仏の守札が貼ってあるのが邪魔になり、またこの両足が柱にかかって入れずに恨みが重なっている。どうか俺を憐れんでともに仇を討ってくれないか」と泣いて物語る。息子も哀れに思っ「その家はどこだ」というと、「俺が案内するからどうか助けてくれ」と言っ、両足をさかさに捧げて前に立っ歩き出したから、息子もその後についていくと、町外れの大きな味噌屋である。息子が戸口の守り札をはいでやると、亡霊はいきなり家の中に飛び込んで、継母ののどぶえを噛み切っ殺した。そこで息子は味噌倉に行っ、味噌桶をたしかめてみると、いかにも子どもがさかさに埋められて死んでいたから、掘り出して、家の人たちに、「こんなことをするからたたられるのだ。早く丁重に葬式をしろ」と言っ、その通りにさせた。その夜、亡霊がきて息子に泣いて礼を言い、「なんとかして恩返しをしたい。それで相変わらず毎夜出るから、俺を退治して殿様のおほめに預かって立身出世をしろ。俺は川原に出るから」と言う。息子は宿屋に帰っから「俺は化物を退治するから見たい者は来て見てもいい」と言っ、それが評判になっ、いつそれ幾日には彼の化物退治があるからということになり、その日は殿様も町人たちもみな川原に集まっ見ていた。すると、そこに生首七積み、骸骨七積みがあっ。それを息子は、「俺はこの化物をこのとおりに蹴飛ばしてやる」と言っ、一本歯の高下駄でぐわいらと蹴飛ばすと、その生首骸骨どもはがらがらと崩れて、川原いっぱい転がりまわっ、からからと笑いに笑い抜いて、ぺらりと（ぱっ）消えてなくなった。もうその夜から化物が出なくなった。息子は、殿様に多くのごほうびをもらった。

成仏できずにこの世にあらわれ出てくる「化け物」の、この世に遺した恨みを果たす手伝いをするこで、「息子」と「化け物」の間に「化け物退治」の約束が結ばれる。そのためこの化け物退治はあらかじめ仕組まれたものであり、笑いが生じるのもそのような意図された場においてである。物語の最後では、息子の化け物退治というこの世での手柄と、化け物自身があの世へ向かうという死者としての宿命が、同時に達成される。

死者でありながらこの世に化けて出続ける存在であるこ、また物語中では声だけの存在で「大角」をもっていたり「生首と骸骨」であったり形にとらわれず化けて出る存在であることを考え合わせると、この「化け物」は死者でありながら死の世界にも行ききらず、この世にあらわれてくる中間的な存在といえるだろう。ここでの笑いは、化け物が転がりまわっ成仏する直前の瞬間に、彼らがたてる「音」と重ね合わせて描かれている。この笑いは「化け物」の笑いであると同時に、「笑い男」で山の木々や水・風が笑うような、場面全体のざわついて動き始めた空気自身の動き、笑いとして感じ取るこもできるように思われる。

さらに、この物語で特徴的なのは、生首と骸骨が「笑いに笑い抜い」た後にそれらが「ぺらりと」消えてしまっ、笑いの消える瞬間が描かれているこである。これが化け物があの世に行ききる瞬間であっと考えると、ここでも死者の世界と生きる者の世界が交わるところに笑いは響き、その世界の秩序がふたたび戻る瞬間にその響きが聞こえなくなったと考えるこができるだろう。前章において、笑いが人間を超えた世界と人間の世界との関係の上に機能して

いる様子をみたが、この物語ではさらにそのどちらの世界にも属していないものが立てることのできる「音」としての笑いが描かれているように思われる。

5. 正体を明かす笑い― 出口と入り口―

次に、笑うことが自らの正体を知らせてしまうことになる物語をみていく。

(1) 「地藏浄土」

【地藏浄土】(稲田ら(1982)より要約。)

爺が婆のつくった団子を持って山へ行く。昼時になり団子を食べようと思って包みをあけると、団子がころころ転がった。爺が追いかけると、団子は「向かいの山の地藏さまのもとまでまいる」と言って転がっていく。やがて団子は穴に落ち、本当に地藏の前に出た。地藏は「これはうまいお供え物だ。ありがたい」と団子をむしゃむしゃたいらげた。食べた後で地藏は爺に「何のお礼もないが、夜になるとここに鬼が来る。夜中になったら二階に隠れていて、鶏の鳴きまねを三べんしてみろ」と言った。言われるとおりに待っていると、夜中に赤鬼やら青鬼やら出てきて、金の分け前をはじめめる。地藏が「ほれ今だ」と言ったので、爺はバタバタ、コケコッコと、3回鶏の鳴く真似をした。すると鬼は「ありや、夜があけるでえ、それ逃げろ」と金も何も置いたまま逃げてしまった。爺はその金を集めて、地藏にお礼を言って持ち帰る。

爺が婆にその話をしていると、隣の強欲な爺がそれをききつけ、婆に団子を作らせ、自分も山にもっていく。隣の爺は木も伐らず、昼が来るのも待ちかねて、昼より先に団子の包みをあける。しかし団子は転がらず、爺はそれを自分で転がす。地藏のところについたものの、それは泥だらけで、地藏は苦々しい顔をするだけで食べようとしない。隣の爺はこれを無理やり地藏の口に塗りたくっておく。そして二階にあがって夜を待っていると、赤鬼や青鬼がやってきて、銭勘定をはじめた。そこでしめたと早々に隣の爺はにわとりの鳴きまねをする。すると、鬼たちは夜が明けるとあわてて逃げだした。ところが、あまり慌てて逃げたので、1匹の鬼がつかずいてじたばたする。これを見て隣の爺が思わず吹き出してしまう。すると鬼は爺の存在に気づいて、殴ったりけったり、半殺しの状態にされてしまう。隣の爺は泣く泣く家に帰った。隣の婆は屋根の上から待ち切れずにみていて、血だらけで真っ赤な爺をみてびっくりして屋根から転げ落ちてしまう。

このような物語は「異郷訪問譚」と呼ばれる。「地藏浄土」では、異郷で宝を得てきた爺をうらやんだ「隣の爺」が、同じようにして異郷におもむき、宝を得た爺のまねをするが、最後の最後で、鬼の失態を笑うことで、正体がばれてしまう。「地藏浄土」の他のパターンとしては、そもそも一人目の爺が笑ってしまうことで鬼にみつかってしまうものもみられる。ここでの笑いは、「二階に上がる」とか鶏の鳴きまねをして、朝が来るのを告げる役割をする、など、人間であることを隠し、人間離れした役割をまっとうできずに思わず漏れたもので、それがみずからの人間くさい存在を暴くことにつながっている。

ここで、隣の爺について考えてみると、この人間臭く笑う姿に、はじめて「隣の爺」の「隣の爺」らしいものごとへの関わり方があらわれているように思われる。そこまで爺は、強欲ばかりが先に立ち、聞いたとおりにふるまいを真似るが、気持ちは常に先走ってしまっている。いわば、行為としては一人目の「爺」と同じことをしているが、そのひとつひとつの行為に「隣の爺」が真の意味で関わっているとは言えない。しかしむしろ、思わず吹き出してしまうことで、その姿が暴かれ、鬼によって半殺しにされるという「爺」とは異なる展開を迎えることになる。ここでは、笑うことが、本人の主体性が関わっていない無意味な行いの連鎖から「隣の爺」を救出する仕掛けになっている。笑いそのものが「思わず」、つまり笑う人自身の意図を超えて生じたものであるが、結果として、そこにその人自身の関わり方や意図の動きが示されている。

このような笑いは、その場の感覚と生じていることのずれが大きくなってきたときにリセットをもたらすという点で、人間の健康さの証であるようにも思われる。「隣の爺」は宝を得ることはできなかったが、内実のともなわない行為の連鎖から抜け出す出口の契機は、笑うことによって生じている。こうした笑いの動きは、河合（2001）が報告している、センチメンタルな自己卑下の世界への下降を始めた河合に分析家が哄笑し、その無意味な自己卑下の感覚が雲散霧消したというエピソードにもみられる。このように、この物語における笑いは、「隣の爺」を無意味な真似ごとの世界から連れ戻す動きをもっていることがわかる。それは笑う人の意図とは無関係に漏れ、彼を動かすものであるが、その背後には笑う人自身のものの見方が動いていると言える。

(2) 「笑い上戸ソルステイトン」

笑うことで自分の存在が怪物にばれてしまう物語は、アイスランドの昔話の中にもみられる。

【笑い上戸ソルステイトン】（小沢ら（1985）より要約）

王子ソルステイトンの両親、王と妃はたいへん仲がよかったが、ある日妃が病に倒れなくなってしまう。ふさぎこむ王に、臣下たちはたいへん美しく気品のあるヘルガという女性をみつけてくる。王は彼女を気に入る、二人は婚礼をあげることになる。ヘルガが初めの3夜はひとりで休みたいと王に願うと、王はそれを許す。ところがソルステイトンはそれを聞きつけていて、いっしょに眠りたいとしつこく願うので、妃は何を見ても笑ったり話したり物音をたてたりしてはいけないといって、それを許すことになる。夜になってやってきたのは女巨人である。ヘルガが桶にいっぱい用意した食べものをあげると、巨人は喜び、ものすごい勢いでそれを食べ、食べながらげっぷ、あくび、おならをする。それを聞いてソルステイトンは大笑いする。ところが巨人は気づかず、食べ終えた女巨人は帰っていく。次の晩も別の女巨人がやってきて同じように食べ、ソルステイトンは笑うが気づかれない。ところが、3日目にきた女巨人には笑っていることが気づかれてしまう。そして、女巨人は王子に「笑い上戸ソルステイトン」という名前を与え、12人の巨人がその番をしている“黄金の蹄”という馬をみつけて王のところに連れてくるまでは、平静と喜びを感じられないようにしてやる、という課題を与える。

ソルステイトンはこの後、妃の忠告を受け、女巨人たちと再び出会って彼女たちの助けを得て、“黄金の蹄”を連れて帰ってくることに成功する。本論のテーマとは離れるため、詳細は割愛するが、この物語では、笑うことによってソルステイトンはその存在を明かしてしまうことになるが、それによって試練を与えられるという展開が理解されるだろう。

前項の「地蔵浄土」では、笑いが漏れることで笑い手は「鬼」に存在を暴かれ、あるべき場所に戻っていたが、この物語では、笑いによって「女巨人」に存在が暴かれ、ソルステイトンは試練への入り口に立たされることになる。前節までに、笑いは異郷の者との交流のうちに生じる可能性をもつものであることをみてきたが、ソルステイトンの物語ではそれが異郷の世界と、試練というかたちで真に出会うための入り口となっている。3度繰り返される笑いは、そうした世界へ彼を動かす働きをもっていると考えられる。

6. 結 論

以上、笑いの生じる物語を概観し、そこでみられる笑いについて考察してきた。これらの視点をまとめる。

まず、笑いによって「音」や「振動」といった動き、あるいは個人の内面に動きがもたらされる物語がみられた。その響き方は物語によって様々で、世界全体にとどろくものもあれば、ふと世界に漏れ出てしまうようなものもみられた。

また、里に対しての山や異郷、生の世界に対する死の世界、あるいは光に対する暗闇の世界というような異世界との交流のうちに笑いが響く物語が多くみられることも明らかになった。その世界への開かれ方・閉じ方は物語によって様々であり、そのあり方によって笑いは新たな秩序が生じる瞬間にもなりうるし、異郷への旅の入り口あるいは日常の世界へ連れ戻す契機となることもあった。突然異世界からの動きが降ってきたような笑いは、笑う人までも動かし、越境させてしまう力をもつこともうかがわれた。さらに、笑いはふとした瞬間に巻き込まれ、人を簡単に動かしてしまう性質をもっていて、その中に入ってしまうと判断や見通しを持つことが難しいこともうかがわれた。笑いによって展開する動きについても、笑いは笑い手の意思とはかかわりが薄く、非常に受動的な動かされ方である場合も物語には描かれていた。

このように、笑いの動きは人間の意図を超えており、そこで笑い手は受け身に動かされてしまうことが推測される。しかしながら、みてきた物語ではその笑いのもたらされ方や閉じられ方は様々で、そこに笑いの肌理^{きめ}や物語の笑いに対する態度の相違があらわれているように考えられた。

これらのことを、心理臨床の実践に返していくとすれば、笑いによる動きがときに世界の構造をも巻き込んだものになる可能性をはらみつつも、それは意識から遠い動きである分、その中でセラピストやクライアントが動かされてしまうしかないことを留意しておく必要があるだろう。しかしその一方で、笑いの生じる場では人は自らの力の及ばないものと何らかの形で関わっているであろうこともうかがわれた。そこには死に至る危険性がある一方で、受動的でありながらも新しい動きが生じ、展開が生まれる可能性も示唆された。このような受動的で巻き込まれる形の変化のあり方を、どのようにとらえ、どのように関わっていくかということにつ

いては、今後も考察を深めていきたいと考える。

<引用文献>

- 浅田由美子 (2004): 心理臨床場面における笑いの取り扱い—その効用と実際, 展望について—, 九州大学心理学研究, 5, 153-161.
- Bergson, H. (1900): *Le Rire*. (林達夫 (訳) (1938): 笑い, 岩波文庫)
- Frued, S. (1905): *Der Witz und seine Beziehung Unbewussten*. (生松敬三 (訳) (1970): 機制—その無意識との関係—, In: 懸田克躬 他 (訳): フロイト著作集第4巻 日常生活の精神病理学他, 人文書院, pp237-421.)
- 平野直 (編) (1958): すねこ・たんばこ 第一集, 未来社.
- Hobbes, T. (1651): *Leviathan*. (永井道雄・宗片邦義 (訳) (1979): リバイアサン, In: 永井道雄 (編): 世界の名著 28 ホッブス, 中央公論社.)
- 稲田浩二 (監修) 遠野民話同好会 (編) (1975): 日本の昔話 10 遠野の昔話, 日本放送出版協会.
- 稲田浩二・小沢俊夫 (編) (1982): 日本昔話通観, 同朋社出版.
- 伊丹仁朗・昇幹夫・手嶋秀毅 (1994): 笑いと免疫能, 心身医学 34, 565-571.
- 河合隼雄 (1982): 昔話と日本人の心, 岩波書店.
- 河合隼雄 (2001): 臨床心理学—見立てと援助, その考え方— 3 心理療法と笑い, 臨床心理学 3, 376-381.
- 木村洋二 (1983): 笑いの社会学, 世界思想社.
- 吉良安之 (1994): 自責的なクライアントに笑いを生みだすことの意義—クリアリング・ア・スペースの観点から, 心理臨床学研究 11, 201-211.
- 松本信宏 (1971): 日本神話の研究, 平凡社.
- 南方熊楠 (1926): 山神「オコゼ」魚を好むと云ふ事, (In 南方熊楠 (1926): 南方随筆, 岡書院, 249-260.)
- 長島平洋 (2001): 山の神祭り, 笑い学研究 8, 111-120.
- 中村喜和 (編訳) (1987): アファナーシェフ ロシア民話集 (下), 岩波書店.
- Naumann, N. (1963): *Yama no Kami - die japanische Berggotttheit*, Asian Folklore Studies, Vol. XX II - XX III, 2. (野村伸一・檜枝陽一郎 (訳) (1994): 山の神, 言叢社.)
- Nietzsche, F. (1883-1885): *Also Sprach Zarathustra*. (氷上英廣 (訳) (1970): ツァラトゥストラはこう言った 上下, 岩波文庫.)
- 大林太良 (1973): 日本神話の起源, 角川選書.
- 小沢俊夫・谷口幸男 (編訳) (1985): 世界の民話 32 アイスランド, ぎょうせい.
- プロップ, V. 斎藤君子 (訳) (2009): 口承文芸における儀礼的笑い—笑わない王女の昔話について, In: 魔法昔話の研究 口承文芸学とは何か, 講談社学術文庫, pp118-169.
- 佐々木高明 (2006): 山の神と日本人—山の神信仰から探る日本の基層文化, 洋泉社.
- 武田明 (編) (1972): 四国路の伝説, 第一法規出版.
- 次田真幸 (全訳注) (1977): 古事記, 講談社学術文庫.
- 山口昌男 (1984): 笑いと逸脱, 筑摩書房.
- 柳田國男 (1998): 笑いの本願, (In: 柳田國男 (1998): 柳田國男全集 15, 筑摩書房.)
- 八住利雄 (編) (1981): 世界神話伝説大系 41 アイルランドの神話伝説 [II] 改訂版, 名著普及会.
- 吉田敦彦 (1974): ギリシア神話と日本神話 比較神話学の試み, みすず書房.
- 吉野横一・中村洋・判治直人・黄田道信 (1996): 関節リウマチ患者に対する楽しい笑いの影響, 心身医学 36, 559-564.

(心理臨床学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

Laughter in Myth and Folktale: From the Viewpoint of Psychology

TANIGAKI Noriko

Laughter is a research theme with two-sided nature and it is not easy to establish an all-inclusive theory of laughter, because it tends to depart from real laughter. In this paper, which focuses on laughter in myth and folktale, I have a view of both and try to demonstrate a point of view that is helpful to understanding laughter in the practice of psychotherapy. As a consequence, I obtain mainly three viewpoints for laughter. First, there will be arisen the movement such as sound, vibration or the internal movement in an individual by laughter. Second, it arises in the interaction between this world and another. That laughter can be both the entrance and the exit to these worlds. Third, laughter has a great tendency to make a person move passively without consciousness. So, laughter in psychotherapy sometimes has a chance to move dynamically. On the other hand, we need to consider the possibility that the laughter does force us to move.